

日本看護診断学会 学会活動に関わるニーズ調査(理事会企画) 報告書

2023年9月25日
日本看護診断学会 理事長 佐藤正美

I. 調査目的

学会活動に対する会員のニーズを把握し、今後の学会活動の充実と活性化に役立てることを目的に、日本看護診断学会全会員を対象にニーズ調査を実施した。

II. 調査方法

1. 対象者：2023年度日本看護診断学会会員 553名
2. 調査期間：2023年4月6日～5月20日
3. データ収集方法：Googleformを用いたWeb調査
4. 調査内容
 - 1) 対象の属性：①年代、②会員期間、③所属施設、④看護診断の使用の有無
 - 2) 学会活動について：活動全体に対する満足度、学会誌のデジタル化と冊子体廃止について、ホームページの閲覧頻度と閲覧ページ、国際交流活動に期待すること、研究支援活動に期待すること、研究支援以外に期待すること、希望する講演・研修・学習会、会員の交流のテーマ、その他学会活動に関する意見

III. 調査結果

1. 回答数：80件（回収率 14.4%）

2. 回答者の属性について

① 年代

50歳代が51%で最も多く、次いで60歳代が23%が多かった。一方20歳代はいなかった。

年代	(人数)
20歳代	0
30歳代	4
40歳代	12
50歳代	41
60歳代	18
70歳以上	4
無回答	1

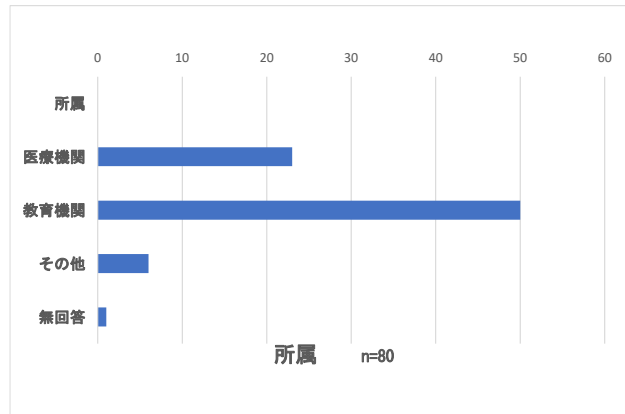
② 会員期間

20年以上が30%で最も多く、次いで16年～20年が22%、1～5年が15%の順が多かった。

本会の会員歴	(人数)
1年未満	1
1年～5年	15
6～10年	8
11～15年	12
16～20年	18
20年以上	24
無回答	2

③ 所属施設

医療機関が29%、教育機関が63%であり、その他には訪問看護ステーション・大学院生などが含まれた。

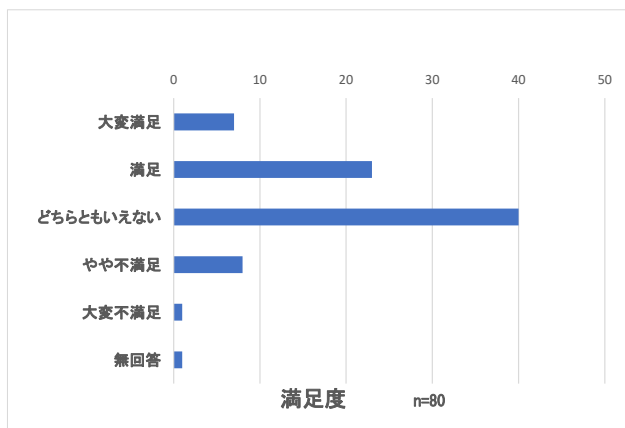


④ 所属施設での看護診断の使用の有無

「使用している」が65%、「使用していない」が28%であった。

3. 学会活動全体に対する満足度

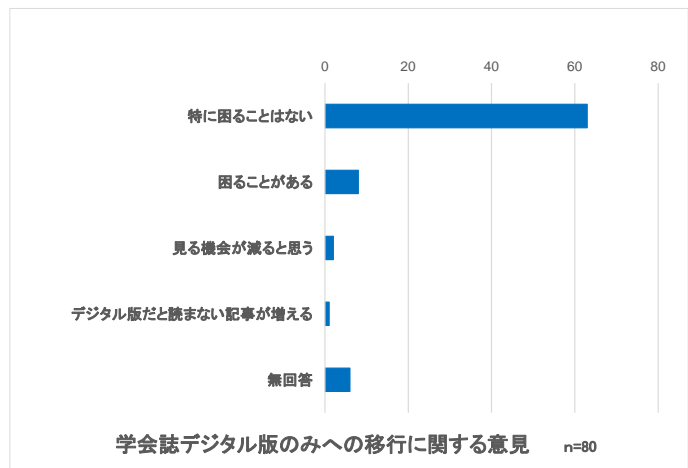
「どちらとも言えない」が50%で最も多く、「満足」29%、「やや不満」10%、「大変満足」9%であった。「大変満足」「満足」を合わせると38%であったが、一方で「やや不満」「大変不満」を合わせると11%であった。



4. 学会誌のデジタル化と冊子体廃止について

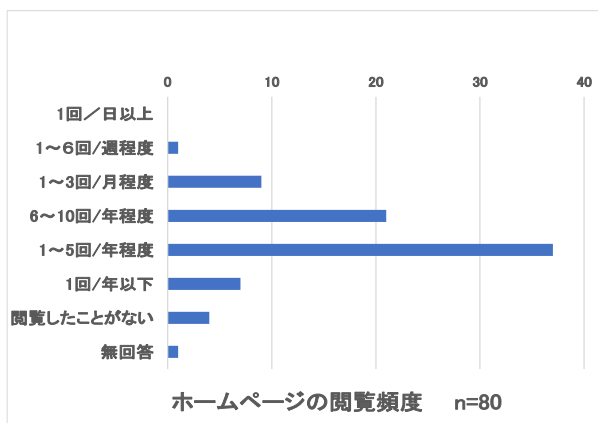
79%が「特に困ることはない」と回答しており、「困ることがある」は10%であった。

自由記述では、「特に困ることはないが、あえてホームページからアクセスして読んでみようという気になれないかもしれない」「いつ発行されているか、連絡がないとわからない」などの意見があった。

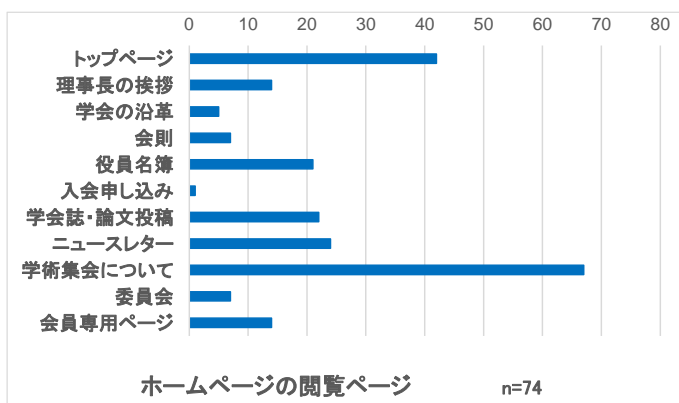


5. ホームページの閲覧頻度および閲覧しているページ

閲覧頻度では「1～5回/年程度」が46%で最も多く「6～10回/年程度」「1～3回/月程度」の順に多かった。



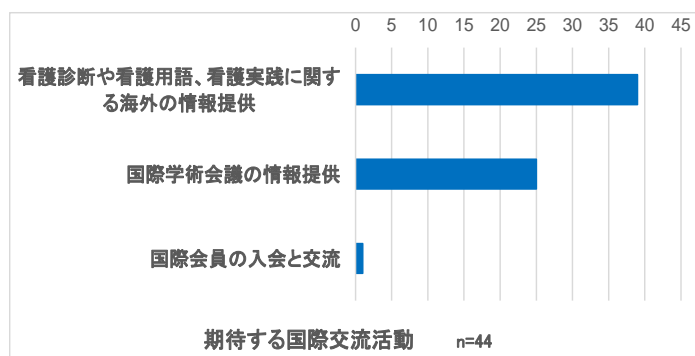
閲覧しているページ(複数回答)については74名から、224件の回答があった。最も多かったのは「学術集会」67件、次いで「トップページ」67件、「ニュースレター」24件、学会誌・投稿論文22件の順であった。自由記述では「あまりにも古いデザインのため、もっと見てみようという気になれない」「見やすく魅力的なデザインであることを希望する」「もっと情報発信を希望する」「会員専用ページ内容が充実していない」などの意見があった。



6. 国際交流活動に期待すること(複数回答)

44名から65件の回答があった。期待する内容は「看護診断や看護用語、看護実践に関する海外の情報提供」39件で最も多く、次いで「国際学術会議の情報提供」25件、「国際会員の入会と交流」は1件であった。

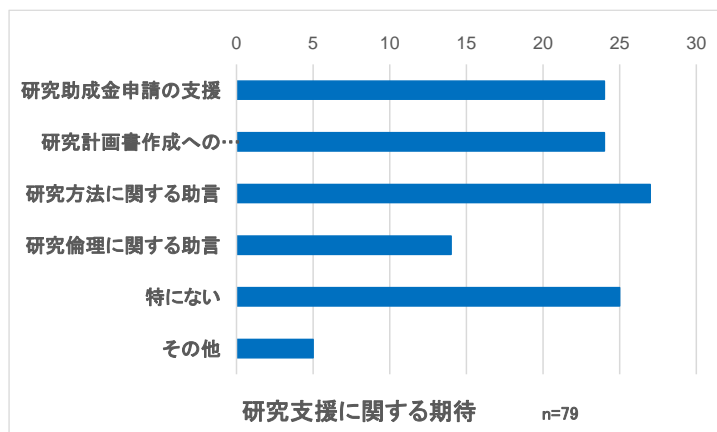
情報提供を期待する学術会議の自由記述では「NANDA-I、ACENDIO、その他看護用語に関する世界的な学術会議」が6件、「看護用語に関する世界的な学術会議」「新しい看護診断に関する情報等」が各1件であった。



7. 研究支援の活動に期待する内容(複数回答)

79名から119件の回答があった。期待する内容は「研究方法に関する助言」27件で最も多く、次いで「研究助成金申請の支援」「研究計画書作成への助言」が各24件であった。一方で「特にない」は25件あった。

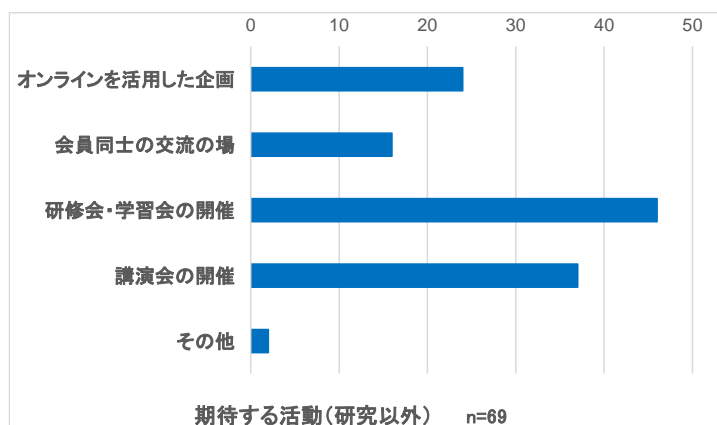
その他の自由記述では「他の学会誌の閲覧」、「助成金の増額」、「学会が看護診断とどう取り組むと看護に貢献できるかを検討する研究のイニシアチブをとることが必要」、「各診断や、その看護について、更に看護診断の13領域別に研究チームを立ち上げることが重要だと考える」があげられた。



8. 研究支援以外の活動に期待すること(複数回答)

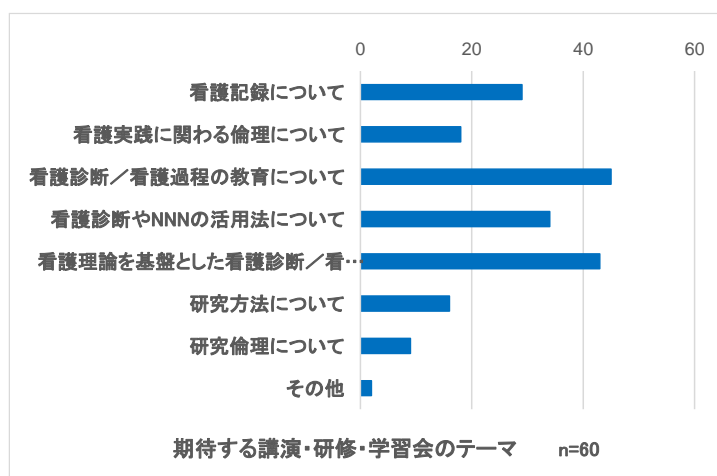
69名から125件の回答があった。期待する内容で最も多かったのは「研修会・学習会の開催」46件、次いで「講演会の開催」37件、「オンラインを活用した企画」24件、「会員同士の交流の場」16件であった。

その他の自由記述では、「看護診断の定義や立場(NANDA-I との関係性)を明確にしてほしい」、「診療報酬(特にコード化: 外来看護)」があげられた。



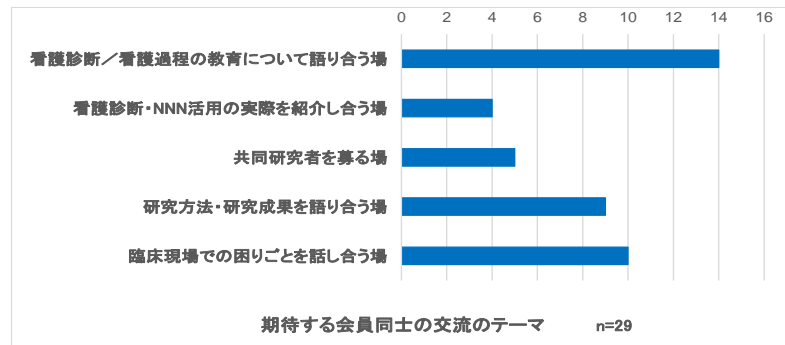
10. 希望する講演・研修・学習会のテーマ(複数回答)

講演・研修・学習会のテーマは60名から196件の回答があった。最も多かったのは「看護診断/看護過程の教育について」の45件で、「看護理論を基盤とした看護診断/看護過程について」43件、「看護診断やNNNの活用法について」34件の順で多かった。その他の自由記述では「中範囲理論を基盤とした看護診断/看護過程について」、「電子カルテで看護診断をバージョンアップさせたい施設への効果的な導入」があげられた。



10. 会員の交流のテーマ(複数回答)

会員同士の交流の場のテーマは 29 名から 42 件の回答があった。最も多かったのは「看護診断／看護過程の教育について語り合う場」で 14 件、次いで「臨床現場での困りごとを話し合う場」10 件、「研究方法・研究成果を語り合う場」9 件の順で多かった。



11. 学会に対する意見

「学術大会で研究発表が年々少なくなっている」「学会誌の掲載論文がほぼ 1 件であり、学術集会の演題数も全国学会としては少ないことから、本学会が研究公表をする場として、看護分野の研究者に捉えられていないのではと感じている」「名称を変えることは難しいと思うが、看護診断に特化した学会というイメージが時代や社会環境の変化についていけない理由の一つと思う」などの意見があった。また「学会員のメーリングリストを作成してほしい」「ニュースなどはメーリングリストですぐに注意喚起してホームページを見るように促してほしい」「共に学ぶ機会がほしい」などの意見があげられていた。

IV. まとめ

本調査結果では回収率が 14.4%と低く会員全体のニーズの把握には限界があるが、調査結果から得た示唆を以下のようにとまとめた。

学会活動全般への満足度は「どちらともいえない」「やや不満足」「大変不満足」を合わせると 60%以上であり、会員の満足度は高いとは言えない。学会の情報発信力を高め会員が満足できる活動を積極的に進めていくことが、今後の学会活動の活性化や会員確保に必要であると考えます。また研究支援や研究支援以外の研修会、学習会、講演会の開催に関する希望の記述が多かった。具体的なテーマでは「看護診断／看護過程の教育について」「看護理論を基盤とした看護診断／看護過程について」など本学会が看護界においてイニシアチブをとるべき内容が多かった。これらの意見から今後の学会活動に求められる内容は以下に集約することができる。

1. 会員への情報発信力向上のための通信手段（ホームページ、会員管理方法など）を改善する
2. 学会発信の研修会、講演会、会員交流の機会を積極的に計画し実施する
3. 国内外の看護診断に関連する情報を積極的に発信する

以上の内容は、各委員会や理事会ですでに取り組んでいる内容もあるが、今後さらに迅速に、計画的に学会活動に反映していくことが重要である。

謝辞：本調査にご協力いただいた会員の皆様に心から御礼申し上げます。

報告者：庶務担当理事
菊池麻由美・佐々木真紀子